

日本語における疑似接辞〔マンモス〕の発達について —用法基盤モデルに基づく分析—

角出凱紀（京都大学大学院生）

1. はじめに

日本語の形態素〔マンモス〕は、<かつて氷河期に生息していた象に似た大型生物>という字義的な意味のほかに、(1) に示されるように<巨大・大規模>という比喩的な意味で使用されることがある（以下、下線は筆者）。

- (1) a. 往時 10万人規模の学生を集めたこのマンモス大学は…
(『毎日新聞』2025年7月30日、全国版、東京夕刊)
b. …大和市と横浜市にまたがる約3600戸のマンモス団地だ。
(『朝日新聞』2025年5月1日、全国版、東京朝刊)

竝木（2013:49）は、「ある語が複合語の前の要素として使われたときに、単独用法とは異なる意味を持つようになる例」の一つとして、この〔マンモス〕を挙げている。その一方で、ごく少数ながら(2)のような事例が観察されることも事実である。

- (2) a. …マンモス化した古い組織からは出てこない独自の発想…
(『朝日新聞』2019年1月3日、全国版、東京朝刊)
b. …分裂の原因は会のマンモス化に伴い…
(『読売新聞』2012年1月12日、全国版、東京朝刊)

ここでも(1)と同様に〔マンモス〕が<巨大・大規模>という比喩的な意味を帯びているが、派生形態素〔-化〕を付加された派生語として使用されており、竝木への反例となりうる。そこで、本研究では、共時的なコーパス調査に基づいて竝木（2013）を実証し、その背景について通時的なコーパス調査に基づいて考察することを目的とする。

2. 共時的調査

本節では、形態素〔マンモス〕の使用実態について共時的な観点から考察を行う。

2.1. 方法

調査に使用するコーパスは『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所 2025）

である（以下、BCCWJ）。同コーパスで、「マンモス」を検索したところ全152件がヒットするが、それらを手作業で次の二つの観点から合計四通りに分類する。第一の基準は「マンモス」が比喩的に使用されているのか、それとも字義的に使用されているのかという点である。第二の基準は、「マンモス」が（1）のような複合語の左側要素として生起しているか否かという点である。各分類の具体例は以下のとおりである。

（3） A. 比喩的かつ複合語

例) マンモス大学、マンモス機、など

B. 比喩的かつ非複合語

例) マンモス化、マンモスのよう（な）、など

C. 字義的かつ複合語

例) マンモス絶滅、マンモスハンター、など

D. 字義的かつ非複合語

例) マンモスの牙、マンモスを描いた、など

最後に、得られたデータに対してフィッシャーの正確確率検定（Fisher's exact test）を実施することで「マンモス」の用法と生起環境に関連性があるかどうか検証する。データの分析には、R（R Core Team 2025）を用いる。その際の、帰無仮説 H_0 及び対立仮説 H_1 はそれぞれ以下の通りであり、有意水準は0.05とする。

H_0 ：「マンモス」の用法と生起環境は独立である。

H_1 ：「マンモス」の比喩的用法は複合語の左側要素として使用されるときに多い。

2.2. 結果

調査結果は以下の表1の通りである。表中のアルファベットは（3）で示した分類と対応している。また、検定の結果、得られた p 値は 2.2×10^{-16} 未満となり、有意水準を大きく下回った。これは、比喩的な「マンモス」が複合語の左側要素として有意に生起しやすいことを示すものであり、竜木（2013）の指摘の妥当性を支持するものである。

表1：BCCWJにおける「マンモス」の生起頻度

	比喩的用法	字義的用法
複合語	A 58件	C 6件
非複合語	B 3件	D 85件

2.3. 考察

当該の〔マンモス〕とよく似た性質を示すものとしてゲルマン語学で指摘される疑似接辞(affixoid)というものがある。例えば、<頭>を意味するオランダ語の *hoofd* や<巨人>を意味するドイツ語の *Riese* がそれぞれ<主要な>と<巨大な>という比喩的な意味を帯びるのは、複合語の左側要素として生起するときのみである (e.g. Stevens 2005; Booij and Hüning 2014; Ralli 2020)。

これに関して、構文形態論 (e.g. Booij 2010; Booij and Hüning 2014; Hüning and Booij 2010) では、(4) のような異なる抽象度の構文スキーマ (constructional schema) を想定しており、それぞれ矢印の左側が形式極、右側が意味極を表している。(4a) は任意の 2 つの要素からなる複合語全般の構文スキーマであり、(4b) はその 2 つの構成要素が名詞に限定された NN 型複合名詞の構文スキーマである。問題の疑似接辞の構文スキーマは (4c) である。

- (4) a. $\langle [[a]_{Xj} + [b]_{Yj}]_{Yk} \leftrightarrow [SEM_j \text{ with relation } R \text{ to } SEM_i]_k \rangle$
b. $\langle [[a]_{Ni} + [b]_{Nj}]_{Nk} \leftrightarrow [SEM_j \text{ with relation } R \text{ to } SEM_i]_k \rangle$
c. $\langle [[hoofd]_{Ni} + [b]_{Nj}]_{Nk} \leftrightarrow [main_i SEM_j]_k \rangle$

端的に言うと、ここでは 2 つの名詞のうち前項が *hoofd* で埋められた形式極と<主要な>という比喩的な意味が結びついた一段階具体性が高い構文スキーマが想定されている。これと類比的に考えると、日本語の〔マンモス〕も同様の構文スキーマ (5) が存在すると予想される (以下、この構文スキーマに言及する際には簡略的に [マンモス+Y] と表記する)。

- (5) $\langle [[\text{マンモス}]_{Ni} + [b]_{Yj}]_{Yk} \leftrightarrow [\text{巨大な } ; SEM_j]_k \rangle$

また、疑似接辞は、その名の通り文法性において語(根)と接辞の中間に位置付けられる (Stevens 2005: 79)。このことから、件の構文スキーマは [マンモス] の単独 (i.e. 語根) 用法から文法化の過程を経た結果であることが予測される。

3. 通時的調査

本節では、前節で提示した仮説について通時的な観点から考察を進める。

3.1. 方法

調査に使用するコーパスは『昭和・平成書き言葉コーパス』(小木曾他 2023) である (以下、SHC)。同コーパスで、[マンモス] を検索したところ全 93 件がヒットするが、このうち比喩的意味を帶びていると判断できる 58 件を調査対象とする。得られた用例を、[マンモ

ス] が単純語として使用されている事例、派生語として使用されている事例、複合語として使用されている事例の三つに分類・集計し、その通時的な変遷を観察する。

3.2. 結果

調査結果をまとめたものが表 2 及び表 3 である。この表から、[マンモス] の通時的発達は大まかに三つの段階に分けることが可能である。

表 2 : SHC における比喩的な [マンモス] の生起頻度

成立年	単純語	派生語	複合語	
1933 年	2	0	0	第 I 期
1941 年	0	0	0	
1949 年	0	0	0	
1957 年	4	3	1	第 II 期
1965 年	1	3	12	
1973 年	0	0	9	
1981 年	0	0	9	
1989 年	0	0	5	第 III 期
1997 年	1	0	2	
2005 年	1	0	2	
2013 年	0	0	3	

表 3 : SHC における比喩的な [マンモス] を含む複合語

	事例（粗頻度）
粗頻度 ≥ 3	タンカー (6)、企業 (4)、大学 (4)
粗頻度 = 2	会社、都市、ビールパーティー、校、基地、選挙区
粗頻度 = 1	部屋、東京、得票、スコアボード、朝日、冷蔵施設、票、酒場、ロッカーリー室、物産、幼稚園、機構、予備校、寄席、新興住宅地

1933 年から 1957 年までの第 I 期には、[マンモス] が (6) のように単純語として使用されるのが専らであったことが読み取れる。

(6) a. ...この七尺に近いマンモスの様な巨大漢を慘々に撲り付けて...

(70M 中公 1933_07028 15230)

b. ...何百万を組織したマンモスのような労働者組織...

(70M 中公 1957_10007 48330)

続く 1957 年から 1965 年には、(7-8) のような派生語としての使用例が見つかる。

(7) a. 電通一社が業界で占めているマンモス的な地位...

(70M 中公 1957_11025 24170)

b. そのことが電通を今日のマンモス的存在へ飛躍させた...

(70M 中公 1957_11025 36710)

(8) a. 事実、NHK は余りにもマンモス化した。

(70P 読売 1965_13029 15080)

b. ...披露宴は、しだいにマンモス化して盛大になってきた。

(70M 文春 1965_04034 40210)

さらにその後、[マンモス] の比喩的な使用は複合語の左側要素として生起するときに大きく偏り、(1) で見たような複合語としての使用へと至っている。

(9) a. ...日本を代表するマンモス企業東芝が...

(70M 文春 1965_06022 2350)

b. またソ連にはモスクワ大学という途方もないマンモス大学がある。

(70M 文春 1973_16033 37600)

また、表 3 に示すように、比喩的な [マンモス] を含む複合語は特定の後項に偏ったものではなく、疑似接辞 [マンモス] の生産性の高さが見て取れる。

3.3. 考察

得られたデータに基づいて、用法基盤モデル (usage-based model) の観点から、構文スキーマの発達について考察する。Langacker (2008: 168) によると、構文スキーマはスキーマ化 (schematization) によって獲得される。具体的には、まず典型的な事例であるプロトタイプから何らかの類似性に基づいた拡張事例が生まれる (i.e. 破線矢印)。そして、その両者から共通点が抽出される (i.e. 実線矢印) ことでスキーマが得られる (Langacker 1987, 1993)。その後、更なる拡張事例が生まれると新たなスキーマが抽出されることになり、より抽象度の高いスキーマへと更新されていくことになる (図 1)。

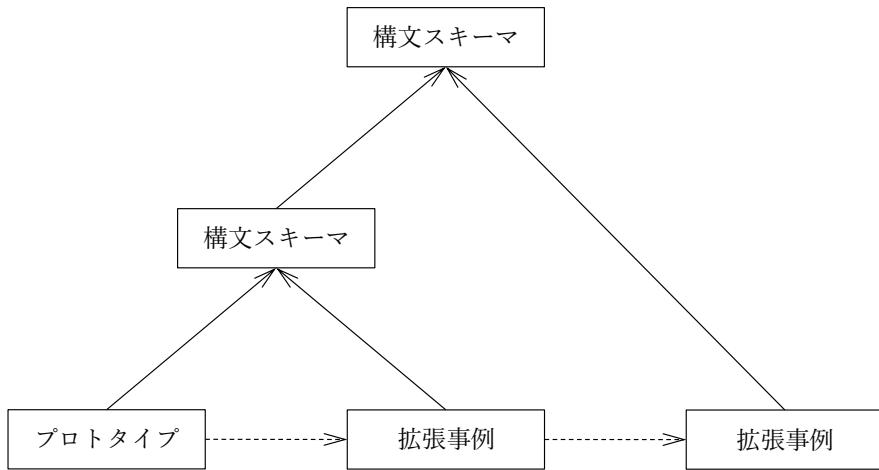


図1：用法基盤モデルにおける通時的構文変化 (Ishizaki 2012: 253 を一部改変)

「マンモス」の比喩的な使用における初期のプロトタイプは(6)に挙げる「マンモスのよう(な)」であったと考えられる。そこからの拡張事例として(7-8)に代表される「マンモス的」や「マンモス化」といった事例が登場するようになる。[-のような]が前接語であるのに対して[-的]と[-化]は派生接辞であるという違いは認められるものの、これらはすべて比喩指標に属している(中村 1977: 450-452)という共通性が見て取れる。したがって、後項の要素が比喩指標であるという制約が課された構文スキーマが抽出される(図2)。

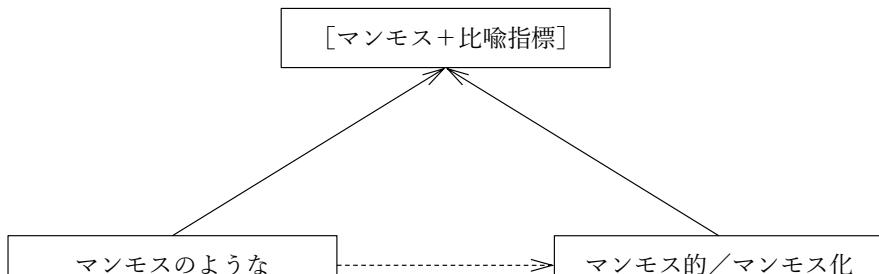


図2：単純語から派生語への拡張

その後、新たな拡張事例として「マンモス企業」や「マンモス大学」といった複合語の事例が登場するようになる。この段階になると、後項はもはや比喩指標である必要がなくなり、そのサポートなしに、<巨大な・大規模な>という比喩的な意味を表すようになっていく。これにより、後項に幅広い要素が入ることを許す構文スキーマ(5)が抽出される、と分析することができるだろう(図3)。このような抽象度の高い構文スキーマの存在が、表3で

確認した生産性の高さに貢献していることが伺われる。

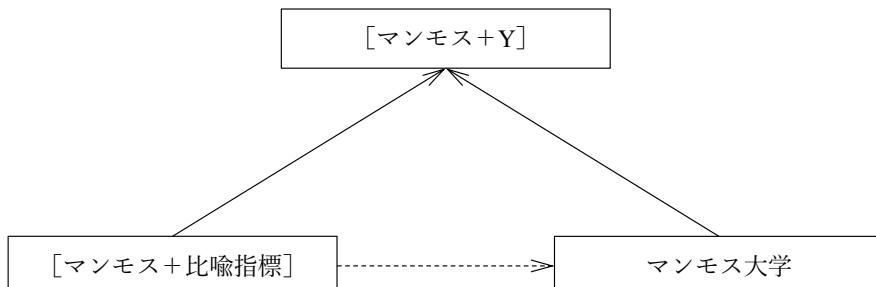


図3：派生語から複合語への拡張

これまで挙げている例がそうであるように、比喩的な [マンモス] を含む複合語のほとんどは NN 型複合名詞である。その点を踏まえると図3の構文スキーマはやや抽象度が高すぎるという批判を受けるかもしれない。しかし、レジスターの問題からか SHC では確認されなかったが、BCCWJ では確認された事例として次のようなものがある。

- (10) a. …今日行ったらちゃんと残っていました♪ (マンモスラッキー！)
(OY03_09167 3770)
b. マンモス疲れましたが、収穫は多かった。
(OY14_14776 10280)

これらの事例では後項に形容動詞（の語幹）や動詞が生起しており、後項は必ずしも名詞のみに限定されているわけではないことが分かる。したがって、図3の構文スキーマは、不当に抽象的であり、誤った予測に繋がるといった批判にはあたらないと考えられる。

4. おわりに

本研究では、コーパス調査を通して竝木 (2013) の指摘を検証した。その結果、共時的調査から [マンモス+Y] という構文スキーマの存在を示唆する結果が得られ、通時的にもそれと矛盾しない結果が得られた。

なお、竝木 (2013: 48-49) は [マンモス] の他にも次のような事例の存在も指摘している。

- (11) a. 豆～：豆電球、豆台風
b. ヒメ (姫)～：姫鏡台、ヒメユリ、ヒメリソゴ
c. オニ (鬼)～：オニヒトデ、オニヤンマ、オニユリ
d. 草～：草野球、草サッカー、草競馬

e. 赤～：赤恥、赤裸

- (12) a. ～音痴：方向音痴、運動音痴、味覚音痴、経済音痴
b. ～ソムリエ：野菜ソムリエ、タオルソムリエ、温泉ソムリエ
c. ～難民：介護難民、ネットカフェ難民、お産難民
d. ～マラソン：読書マラソン、禁煙マラソン
e. ～甲子園：俳句甲子園、短歌甲子園、写真甲子園
f. ～銀座：戸越銀座、上野銀座、谷中銀座

本アプローチがこれらに対しても同じく有効であるかどうかは今後の課題としたい。

参考文献

- 小木曾智信・近藤明日子・高橋雄太・田中牧郎・間淵洋子 (編) 2023. 『昭和・平成書き言葉コーパス』(中納言 2.7.2, データバージョン 2023.5) <https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/> (2025年10月5日最終確認)
- 国立国語研究所. 2025. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(中納言 2.7.3, データバージョン形態論情報 2021.03, 分類語彙表情報 2025.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2025年10月5日最終確認)
- 中村明. 1977. 『比喩表現の理論と分類』東京: 秀英出版.
- 竝木崇康. 2013. 「複合語と派生語」, 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム No.6』43-57, 東京: ひつじ書房.
- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Booij, Geert, and Hüning, Matthias. 2014. Affixoids and constructional idioms. In Ronny Boogaart, Timothy Colleman and Gijsbert Rutten (eds.), *Extending the Scope of Construction Grammar*, 77-106. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Hüning, Matthias, and Booij, Geert. 2014. From compounding to derivation: The emergence of derivational affixes through “constructionalization”. *Folia Linguistica* 48(2): 579-604.
- Ishizaki, Yasuaki. 2012. A usage-based analysis of phrasal verbs in Early and Late Modern English. *English Language and Linguistics* 16(2): 241-260.
- Langacker, Ronald. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. 1993. Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, Ronald. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Ralli, Angela. 2020. Affixoids: An Intriguing Intermediate Category. In Lívia Körtvélyessy and Pavol Štekauer (eds.), *Complex Words: Advances in Morphology*, 217-237. Cambridge: Cambridge University Press.
- R Core Team. 2025. *R: A Language and Environment for Statistical*. <https://www.R-project.org/>
- Stevens, Christopher. 2005. Revisiting the affixoid debate: On the grammaticalization of the word. In Torsten Leuschner, Tanja Mortelmans, and Sarah De Groodt (eds.), *Grammatikalisierung im Deutschen*, 71-83. Berlin/New York: Walter de Gruyter.